

教宣 せぶん

社長訪問の舞台裏

当支社を社長が訪問しました。「サイトウキネンフェスティバル」に合わせた訪問だったようですが、社員との交流は、就業時間終了後およそ1時間、座談会形式で行われました。

来訪を伝えるメールは「ご多忙の中、ご訪問いただけることになりました」という言葉に始まり、「参加者を事前に把握しておくよう」、「質問者も事前に決め、質問内容は事前にチェックするよう」指示されていました。また、出席者についても「その他社員(特定・ASP・RAなど)、その他の関連会社メンバー(TCS・TASなど)は時間外につき、本人希望がある場合のみ」と記されており、こういった基準をベースに支社で調整するよう指示が書かれていました。

出席しようとも思いましたが、まるで大名のお国入りのような、あまりの「準備万端」ぶりに、興味が失せました。

当社は「自由闊達な社風がある」と自負しています。役職にかかわらず「さん」付けで呼ぶなど、自由にものが言える風土があることを企業文化として内外に宣伝しています。しかし、事前に質問者を決め、質問内容を点検し、社長に、少しでも心地よい時間を過ごしていただくがごとく、回りが気を使っていくことに、どれだけの価値があるのでしょうか？自由闊達な社風とはこういうことなのでしょうか？

社長は、訪問課所で部下がこれだけ気を使っていることを知っているのでしょうか？そして、望んでいるのでしょうか？聞きたいのは末端で働く、現場の偽らざる、生の声だったと思いたいのですが、表面を大切に、看板だけを磨こうとする経営者の姿を目の当たりにしている社員は、同じスタンスで経営者をもてなすのかもしれない。表面だけ取り繕った、上辺だけを着飾ったところからは、社員の本音も、業務改善のヒントも、献身的な提言も生まれてこないことは言うまでもありません。